

1 引用

ともすると英語の音声訓練は、一方的な抗議で理論を教え込まれたり、それとは全く逆に、ひたすら正しい発音をするための訓練であったり（あるいは、聞き取り能力をつけるための繰り返しドリルだったり）することが多いのですが、私の講義では「英語が聞き取れなかったり、英語らしい発音にならないのはなぜか、を考えること」を大切にしてきました。

ですから上記の指定文献をよんでもらう場合も、その文献の叙述をうのみするのではなく、「読んで発見したこと」を「引用」しつつ、「同時に「読んで新しく生まれた疑問」を書いてあるレポートを、高く評価してきました。(p.52)

2 理由

この部分を読んでいる時、私はこの本で寺島先生が伝えたいことによく気付くことができたような気がしました。

今回寺島先生からこの本を読んで読書レポートを書くように指示された時、私は「作文の書き方の本を読んでレポートを書くとは、どういうこと？」と感じました。私が正しい文の書き方ができるのかを寺島先生が確かめるためなのだろうか？読んで感想を書くといっても「なるほど、確かにこうすれば読みやすい作文がかけますね」で終わってしまうのではないかと思っていたのです。それをレポートしても内容の薄いものしか書けそうもなく、何をどう書いたら良いのかと半月以上躊躇していました。

寺島先生の電話でのご指導の中、「内容の巧拙を考えなく良い、いい格好をしようとしてはダメだ、“恥をかく勇氣”を持ちなさい」と言われてもう一度最初から読んでみると、それまでの自分の態度が恥ずかしく思えるほど、示唆に富む内容が次々に見えてきてびっくりしてしまいました。

私はよく生徒たちのことを「知識を丸暗記して、試験で吐き出すだけの勉強スタイルだ」と言い、「なんでこんな勉強スタイルしかできないのだろう」と嘆いたりします。それは全て彼らの「勉強歴」の中に「何かに疑問を感じ、自分で考え、その疑問に対して自分なりの結論を引き出す」という体験が希薄だからでしょう。

この本で書かれている「作文技術」とは、もちろん作文やレポートの「書き方」を学ぶことには違いありません。しかし同時にそして更に重要なこととして、その「技術」とは「思索することや自分の考えをもつこと」という生徒、学生、ひょっとすると私たち教師さえもがきちんとできていない「思索のプロセス」なのだと思えてきました。

3 疑問

「生きる力」とか「探求」とか「アクティブラーニング」とか、これまでも「自ら考える力を育てる」という方向性が叫ばれてきたのに、それがなぜ学校現場では軽視され続け、「本流」になり得ないのか？

1 引用

先生が『英語にとって文法とは何か?』の中であげていらっしゃる「自分たちのちからに対する確信を育てること」と「文章を読み、情勢を分析するちからを育てること」の二つの授業の狙いは、まさに今、教育に求められているリテラシーの育成に直結していると思います。

読解リテラシーの育成、「文章を読み、情勢を分析するちからを育てる」ことは、言語教育・英語教育だからこそできることではないかと思うのです。

私が高校を卒業するまで受けてきた英語の授業は、単語と文法の知識から本文を訳すだけでした。そんな授業では、生徒は英語を学ぶ意義もわからず、意欲もわかず、自分のちからを試す場も得られず、英語は死んだ言語になってしまいます。(p.165)

2 理由

英語教育講座の学生さんが、英語を学ぶということが単に語学として単語や文法を覚えるということではないことに気づき、英語が話される国であるアメリカの姿を「アメリカバンザイ、ワンダフル」式の思い込みのない目で見ることができるようになるという、中間レポート以降の彼女の学び中での成長がこのレポートから伝わって来ました。

彼女はそこからさらに進めて、英語教育の目的を「読解リテラシー」として挙げ、その具体的なプランを考えて p.172、p.173 にあるような形で示し、これから先自分たちが授業を行う上での指導をどう進めていくかの案までも考察しています。

近頃では、まるで「お金を得るための外国語」と言わんばかりに「実践的な外国語を身につけられますよ」と、「オールイングリッシュの授業が全講座の何割」とか「英語に加えて同時に主専攻として他の外国語を学べるマルチ外国語習得制度」等で、見せかけの「外国語勉強しています感」を見せびらかすようなコース設定をする大学の宣伝をよく見かけます。それらはどれも現実味が乏しく、学生数獲得のための「方便」にしか見えません。

そんな薄っぺらな学びではなく、「真の人間力の育成や、世界（国内外を問わず、自分のいる空間の外）へ目を向け、“日本はダサイから興味ない、日本の社会や政治も興味ない、外国＝アメリカ＝ワンダフル”といったステレオタイプやバイアスから解き放たれた異文化理解をしよう、そのための外国語学習をしよう」という深い学びに挑んでいる学生さん、そしてそのような学びの場があるという事実に感服してしまいました。全く羨ましい限りです。自分も若いころにこのような「学び体験」をしたかったなあと思いました。

(ただ、当時の私がこのような学びの必要性に気づくことができたかどうかはまた別の問題ではあります。)

3 疑問

寺島先生が岐阜大学を去られた後も、岐阜大学では当時の寺島先生の講座のような学びは続いているのか？岐阜大学での寺島先生の講座での「学び」のスタイルを、私も含めて他の教師が「持続可能」なものとして継承していくには何が必要なのか？